
Happiness days～月之章～

鈴林 臨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H a p p i n e s s d a y s 〽月之章〽

【Nコード】

N 6 5 2 1 C

【作者名】

鈴木 臨

【あらすじ】

魔法の使える人間がいる世界で、魔法の使えない月森拓海が巻き起こす様々な出来事。拓海の明日は幸か不幸か？そして拓海とその周りの仲間に隠された過去とは？拓海達が神様学園を中心として巻き起こす学園ファンタジーコメディ、そしてちょっとラブ要素もあり？の楽しい日々の数々をお楽しみ下さい。（前作の『はぴねすでいず！！』とは関係ありませんので、これだけでも楽しめます。そして、前作をお読み頂いた方はより一層バカになった彼等をお楽しみ下さい）

プロローグ（前書き）

この作品は『はびねすでいずく月之章』の改訂版になっております。

プロローグ

かつて、この世は一つの世界だけで構成されていた。
しかし、ある者によってその世界がいくつかの世界によって構成
されるようになった。

それが正しいかは誰も知らないという。

……まあ、はっきり言ってそんな事はまったく関係ない話なんだから
けどね。

だって世界がいくつもあることなんて誰も知らないしね。

だけど、俺は奇跡を信じてこの幸せな時間を・・・過ごしてますッ
ス。

~~~~~

「拓海君がこのクラスに入ってから一ヶ月が過ぎたけど、もう慣れた？」

麻奈美が俺に質問した。

「ああ。嫌っていうほどに、ね」

「そう、よかった」

麻奈美はにっこりと満面の笑みを見せた。

「拓海――!!」

そんな奇声と共に、小雪が俺に抱き付いてきた。

「うわっ！　小雪、不意打ちは、……ギャー――!!　腰があああああ!!」

「キャー――!!　お兄ちゃんの体が曲がってはいけない方向にいい!!」

「ちよつと小雪ちゃん、そろそろ離さないと拓海さんの命がつ!」

「お、もつとやっちゃええ!」

「千鶴、お前イヤな奴だな」

「あらあ、拓海君ならいいんですよ」

「弥生ちゃんもさっさと残酷なと言うんだな。ま、面白いから許す」

「おい!　千鶴も和彦も弥生ちゃんも裕司も静観してないで助けてくれよ」

「えー、無理っ!!」×4

お前等、後で殴るぞ?

「拓海君、私で良かったら助けるよ」

「ありがとう、美紀ちゃん」

「それじゃ、麻奈美ちゃんと花月も手伝ってね」

「うん!」×2

三人はそう言って小雪を俺から離そうとした。  
しかし、小雪はかなりの力で俺を掴んでいた。……つまり、

ゴキッ!!

『・・・あ』

その場にいた全員がハモった。

あはは、さよなら俺!

俺はその場に倒れ込んだ。

「拓海君!?!」

「お兄ちゃん?」

「拓海?」

「イヤー、拓海さんが口から泡吹いて死んじゃいました!」

「花月ちゃん、まだ死んでないよ。まだ手がピクピク動いてるし」

「てへっ、やっちゃいましたね」

「あはははは、もう最高だよ」

「ふふふ、本当ですねえ」

「ぎやはははは・・・、拓海、笑い死にさせる気かよっ!?!」

おいおい、……お前等、全員最悪だよ。

やっぱり、ここにいると命がいくつあっても足りないな。……つ  
てか、なんで俺はここにいるんだよ?

・・・ま、いっか!

なんだかんだで、俺はこいつ等の事が好き・・・なのか?

## ブログ（後書き）

予定としては、毎週月曜日を更新日としております。

## 前日

広く広がった草原。上を見上げれば青く澄みわたった空。その中に寝転がった俺がいる。常に心地よい風が吹き、それが俺の体、そして髪の間を通り抜けていく。その場所に覚えもないのに、俺はその場所を知っている気がした。視界に入る青空に白い雲が通り過ぎていく。

「つ……み……ん？」

誰かが何かを囁いたような気がした。女の人の声だ。しかし、それはとても小さな声で、よく聞き取れなかった。辺りを見渡しても誰もいない。

「だれ……？」

俺はその誰かに聞いたが、その声はもう聞こえなくなっていた。もう一度辺りを見渡したが、やはり誰もいない。何故か寂しさが体を駆け巡った。泣きそうになるような感じではない。脱力感が体を襲い、立っているのがやっとな感じだった。しかし、体を支える脚はガタガタと震えていた。

「お……い……ん」

突然、声が聞こえた。しかし、今度はさっきとは違って幼さがあり、絶対に知っている声だった。俺はそこで、そんな不思議な夢から覚めた。と言うより、強制的に起こされたのだ。



目を開けると、そこは紛れもなく俺の部屋だった。

ベッドの向かい側に本棚があり、その隣にクローゼット。その間に窓があり、ベランダへと続いている。そんな何もない部屋に、まだ1週間しか経過してないが、段々と慣れてきていた。春の朝日がカーテンをすり抜けて、俺の部屋を明るく照らしている。

ふと違和感を感じた。起きたばかりというのに、異様に体が軽いのだ。それに息苦しい。寝ぼけているのだろうか？ 体に力を入れていないのに背中がベッドから浮いている。

「「わっしょい。わっしょい」」

窓の向かい側に部屋のドアがある。その前から声が聞こえる。寝ぼけている俺の耳でも、夢のなかで聞くよりは鮮明に聞こえた。回らない首を無理矢理に回し、そちらの方向に向けた。

すると、二人の少女がロープを引っ張っていた。

うるさいなあ。俺はそんな事を言おうとすると、不思議と五月蠅い環境なのに、強烈な眠気が襲ってきた。

……まあ、いいか。

俺は薄れゆく意識の中、頑張っている二人にエールを送った。

あれ？ ……って!?

「二人とも!?! 止めなさい!?!」

「あ、起きましたね」

少女の片方である、恵魅めぐみが俺の目覚めを確認してロープを離したが、もう片方は一生懸命で聞こえていなかった。

「わっしょい。わっしょい」

彼女の持つロープは、天井を薦って、俺の首に繋がっていた。持ち上げられた体はさっきより低くなったが、未だにベッドに到達はしていない。

「止めんかい!!」

俺は引かれていたロープを、逆に引っ張った。少女の体は軽く、すぐに持ち上がった。

「あ、お兄ちゃん。おはよう」

宙吊りにされたまま、君枝きみえが言った。

「何がしたかったんだよ!? 殺人か!？」

「お兄様、そこは欧○か!? だよ」

はい、無視!!

「じゃあ、死んだらどうする!？」

「パクリネタはダメ!」

これだけはツツコンどかないとな。

「お兄ちゃんが起きないから」

いやいや。むしろまた寝ちゃうからね。永眠だよ。

「つたく、もう少しで死んでたぞ」

「その時はその時です」

ガッツポーズを決めて、何かほざいてやがる恵魅は無視。

それにしても、他に何か良い起こし方はなかったのだろうか？  
危なく意識が飛ぶところだったぞ。ってか、そのまま帰れなくなっ  
てたぞ？

俺は寝癖交じりの頭を軽く搔いた。

俺の名前は月森拓海。何処にでも生息している。……じゃなかった。（何処にもいたら気持ちわりいよ。）何処にでもいるような普通の中学3年だ。つまり、来年の春からピカピカの1年生だ。（友達100人できるかな？）しかし、まだ4月。そうなるには、まだ先の話だ。それに今年、俺は転校をするためにこっちに越してきた。まだ1週間しか経っていない。新しく入る学校は、どうやら初等部から大学まであるらしい。つまり、中学を卒業しても、まだその学校にいる事が出来るらしい。

しかし、ここで疑問が生じるだろう。何故、卒業を間近に控えて転校したのか？

まあ、軽い諸事情と思って戴きたい。

そんなこんなで、俺は明日から新しい学校に入るのだ。まあ、あそこには古くからの友人や、二人の妹達もいるから不安はない。……心配はあるが。

「お兄様。明日から新しい生活が始まるのですから、気を引き締めてくださいね」

この敬語を使いつつ、性格がひねくれているのは、妹第1号の月

森恵魅。多分、さっきの起こし方を考えたのは、こいつだ。  
基本はしっかりしているのだが、よく悪戯をするのだ。つまり、  
かなり質の悪いヤツだ。

「お兄ちゃんも私達と同じ学校なんだね。何だか楽しみ」

これは妹第2号の月森君枝。さっきは俺を苦しめていたが、根は  
真面目である。いつも恵魅の悪戯に付き合わされている。ちよつと  
マイペースが偶<sup>たま</sup>に傷。

ちなみに二人は年子で、恵魅が小学六年生。君枝が中学1年生だ。  
校舎は初等部、中等部、高等部、大学で違うが、二人と俺は全く違  
う校舎になるだろう。

恵魅と違う理由は分かると思われるが、君枝と違う理由が分から  
ないと思われる。その理由は後ほど話すでしょう。

「あのさ、今日は春休み最後の日なんだから、もう少し寝ててもバ  
チは当たらんと思うぞ？」

「仕方ないですよ。明日が待ち遠しくて早く起きてしまったのです  
から」

「そうだよ。私達だけ起きててもつまらないもんねえ？」

……こいつら。身勝手過ぎだろう？

覚めきってしまった頭をもう一度寝かす事を諦め、俺は下に降り  
た。

階段の最後の段が見えてきた所で、俺は気付いた。

「お先どうぞ」

俺は先頭を恵魅に譲った。

「どうしたの？」

「いいから、いいから」

恵魅は不思議そうな顔をして俺の先を歩いた。俺は恵魅の二段手前を歩いた。

恵魅が最後の段を越えて、下の階の床を踏んだ瞬間。

「おはよう！」

陽気な声と共に、何かが恵魅を捕まえた。

「わっ!？」

恵魅は驚き倒れそうになったようだが、その何かが恵魅を支えて倒れずに済んだ。

俺はこれを予想して恵魅を先頭にしたのだ。思えばここに越してきて1週間。俺は何度も餌食になったものだ。いや、越してくる前もあった。しかし、それは1週間に一回程度でまだマシな方だった。相手が男なら殴っても良かったが、最近は殴れない。だって……。

「今日は恵魅ちゃんね。おはよう！」

「お母さん!？」

そう、俺達兄妹の母、月森つきもりきょうし今日子である。お分かりの通り、息子並びに娘の溺愛歴が14年である。性格は明るく、大抵の事はこなせる優秀な母なのだが、時々面倒くさがりな所が偶に傷。そして、あくまで俺の予想なのだが、ショタ、ロリコン疑惑説が浮上している。

「違うもん。小さくて餅肌の子供が好きただけだもん。あの成長しきってない体がなんとも……エヘッ」

……それを言うんじゃないか？

こんな変わった人物が住む月森家。まあ、実家にはもっと変なのが勢揃いしている。1週間前には、そこに住んでいたのだから自信を持って宣言できる。

こんな個性的な連中に囲まれての生活。最初は不安だったが、今では徐々に慣れてきていた。毒氣に当たらないよう気を付けなくては。

俺はまだ知らなかった。こんな朝が、まだ平和であった事を。そして翌日に控えた転入の日に、まさかあんな事が起こるということを……。

## 【二日目】1時間目―天宮麻奈美

昨日の朝よりは暖かいだろうが、それでも寒い朝でした。『月光荘』を出て、私は思いつきり伸びをした。背中の骨が少し軋んで音を立てた。

「麻奈美ちゃん。おはよう」

まだ眠そうな海道夜未ちゃんかどうよふちゃん。彼女は朝が苦手で、起きるのに1日分の労力を使ってしまうと言っていました。

夜未ちゃんは時々、立ちながらも寝てしまいそうになる。そんな時、手に持っている鞆を落としそうになりますが、その度に目を開けて、しっかりと持ち直すのです。見ていて心配になります。

「夜未。麻奈美。おはよう！」

夜未ちゃんとは違って、今度は日向小雪ちゃんひゅうがこゆきが元気な挨拶をしてくれた。彼女は朝から晩まで常にこのテンションを保っています。私には真似できない所業です。

そうそう。私の紹介がまだでしたね。……別に誰に言うわけではありませんがね。

私は天宮麻奈美ですあまみやまなみ。特に紹介はありません。多分、普通の中学生です。以上ですが、別に良いですよ？

卯月。それは不安と期待の月。終わりの後の始まり。すべてはこの月から始まる。一年という時の流れのスタートライン。

まあ、私にとってはそのスタートラインは大分先になってしまいましたがね。理由ですか？ だって、小学生からずっと教室が変わらないですからね。別に勉強が出来ない訳ではありませんよ（笑）



。ただ、そういうクラスというだけです。念のため、もう一度確認します。別に私が頭が悪い訳ではありませんので、悪しからず。私……と言うか、クラスのみんなの為に申し上げておきますね。本当にしつこくとすいませんでした。

「麻奈美？ 誰と話してるの？」

「そうだよ。さっきからどうかしたの？」

「え！？ べ、別に誰でもないよ」

画面の向こう側の方々とは言えない。変人扱いされそうですからね。

「さて、行こうか」

私達の住む『月光荘』の鍵を閉めて、私達は横に並んで学校に歩き出した。

その時、小雪ちゃんと夜未ちゃんがボソッと独り言のように放った言葉を、私は聞き逃さなかった。

「小雪も……語り手やりたかったなあ」

「……私もやりたかった」

……分かってるなら、聞かないでよ。二人とも（涙）。

## 2時間目―我孫子和彦

学校の最寄り駅の隣の駅。俺等の朝はここから始まるような感じだ。

俺は我孫子<sup>あびこかずひこ</sup>和彦。神様学園<sup>しんようがくえん</sup>に通っている。身長は190ほどあるが、中学生だ。むしろ、俺が正常なんだ。みんなが小さすぎるだけだ。世界を見てみる。200を超える人なんて珍しくないぞ？ みんなが小さすぎるだけなんだ。

「和彦？　どうかしたの？」

「あ、すまん。何でもない」

ちょっと取り乱してしまったようです。すいません。

今、話し掛けて来たのは相原千鶴<sup>あいはらちづる</sup>。いつも明るい性格の天真爛漫。と言うより、何も考えてなさそうな猪突猛進娘。俺等のクラスの中じゃトラブルメーカーの地位を保っている。ある意味はた迷惑な奴だ。

「ねえ、和彦？」

「ん？」

「蹴るよ？」

「すいませんでしたッ！！」

俺は深々と頭を下げた。

こいつには頭が上がらないのは、今に始まったことでない。

その時、肩をポンツと叩かれた。見ると、笑顔で血管を飛び出させた拳を握り締めている千鶴がいた。

「すいやせんでしたッ!!」

俺は公衆の面前で土下座をした。今しないと、次の瞬間には裸でボコボコにされ、気絶した状態で放置されそうだったのだ。

「おはよーッス」

眠そうな声で、井上裕司いのうえゆうじが現れた。

「何で土下座なんかしてんだ？」

「色々諸事情……がな？」

「ふーん」

こいつは井上裕司。簡単に言うと、千鶴の男版のような感じだ。少し違うのは腕力があり、喧嘩早い所もある。しかし、仲間思いな面もちゃんと備えている。

「まあ、ドラ○エで言うスライムみたいな感じだ」

「ほお？ お前はそんな目で俺を見ていたのか？」

裕司が怒りマークを額に乗せて、俺に迫ってきた。

「ち、違う！ 今のは千鶴がだな」

原因を作った千鶴は、そっぽを向き、わざとらしく口笛なんかを吹いていた。

こいつ、さっきの仕返しか？

「違う。誰の男版だって？」

千鶴は目を逆二等辺三角形にして、俺を睨み付けた。

「すみませんしたぁッ!!」

今日の朝だけで三回。だから、語り手なんてやりたくなかったんだよ（涙）。

『だけど、千鶴や裕司がやってもロクな感じにはならんだろうな。ましてや、あの娘にやらせたら……（汗）』

「和彦くん？ 呼んだあ？」

後ろから気配もなく、そんな声だけが聞こえた。

「い、いいえ。よ、よよよ呼んでませんよ？」

「あらあ、そお？」

語り手やると踏んだり蹴ったりだなあ。

「皆さん、おはようございますう」

「おはよ。弥生ちゃん」

語尾を延ばすゆっくりに喋る不思議系少女、白鳥弥生しらとりやよいちゃんの登場だ。いつも何処からともなく現れる。まるで生えてくるようにだ。

「かあずひこくうん？」

「違います。私が思ったことはありません。台本、……そう！  
台本に載ってたんです」

「じゃあ、私が燃しますので、それを差し出せですう」

100円ライターをカチカチと鳴らせながら、近づいてきた。

「安心してください！　自分が燃やしておきました。跡形もなく（涙）」

「そうですか。なら、良しとしましょう」

ライターなんて何処から出したんだよ！？　ってか、俺ってこんな苛められキャラなのか！？　降板したいよ（涙）。

「さて、行こうか」

「和彦、行くよ」

「和彦くん、大丈夫ですよ。私が降板なんかさせないです」

俺、あと何話生きていけるかな？

### 3時間目―蜜柑と李

街から遠く離れた森の中。普段は小動物さえいない。しかし、その日は違っていた。

袴姿の少女が、腰に携えた刀を握って無我の状態にあった。よく瞑想し、周りの風によって起こされた、樹々のぶつかる音、葉が地面に音、そして鳥の囀りさえも聞こえていなかった。

しばらくの間、彼女は微動だにしなかった。一枚の葉が、彼女の目の前を過ぎようとした時、彼女は目を開き、その葉に向かって一太刀抜いた。

葉が地面に着き、一枚だったのが二枚になっていた。真ん中を切った訳ではない。葉の表と裏で切り分けたのだ。

「お見事アルね！」

彼女の後ろで、拍手の音がした。そこには同い年くらいの制服の少女がいた。

「いや、まだまだだな。少しばかりムラがあるでゴザルよ」

刀の少女は、二枚の葉を後ろの少女に手渡した。

普通に見れば、真っ二つ。しかし、二人の目にはそれが明らかに映し出されていた。

「まあ、いいんじゃないかな。それなりには」

「何を言っておるでゴザル。剣の道、これすなわち精進の道でゴザル」

「ありやあ、そうだったアルね」



侍少女と漫画に出てくるようなエセ中国人の少女。

侍の方は神無月蜜柑<sup>かななつきみかん</sup>。中国娘の方は穂村李<sup>ほのむらすもも</sup>。共に今年から神様学園高等部の学生だ。ちなみにクラスは、

「あ、ほら、今日は学校アルよ」

クラスは、

「それでコザったな」

喋らせて！

「嫌でござる」

「嫌アルよ」

……虐めだ。ナレーター虐めだよ（涙）。つくづく語り手を虐める物語だ。

「さて、行くアルよ」

「それでゴザルなあ」

二人は学校に行くため、山を降りた。常人なら小二時間は掛かる距離を。

ちなみに現在の時刻は8時ちょうど。着席の時刻はその30分後である。

これはあくまで余談だが、二人が去った後、神無月蜜柑の居た場所の周辺の葉はなく、周りにあった木が蜜柑の斬った場所から斬られていた。

蜜柑は葉を斬ったのではない。自分の周りにあった木を斬ったのだった。それにも、少しのムラがあった。二人は葉よりも、木の話をしたのかもしれない。

## 4時間目―四谷花月

今日から学校です。久しぶりなので、何だかハイになってます。でも、久し振りに皆さんに会えるのが楽しみです。

「お姉ちゃん。急いで急いで」

私の言葉と共に、お姉ちゃんが階段を降りてきた。まだ起きたばかりのようで、寝癖があり、瞼も覚束無い様子だった。おぼつかない

「早く急いで」

早く行きたくてウキウキしている私。それをまだ覚えていない目で見るお姉ちゃん。

「だって、まだ7時だよ?」

「えっ!?! 何言ってるの? もう8時少し前だよ」

「……え?」

一間を置いて、お姉ちゃんは居間の掛け時計を覗いた。

「ヤバイよお!?! 忘れてたよ!?! 遅刻だよ!?! どうしよう!?!」

たくさん単語を並べて、お姉ちゃんは急いで支度をした。お姉ちゃんが支度をしている間、私が私達姉妹の話をしよう。まず、私は四谷花月よつやかつぎ、中学一年生。その日暮しをモットーに生きてるつもりです。

そして、さっきから私がお姉ちゃんと言ってる人物は美紀みきお姉ち

やん。お姉ちゃんは見ての通り、マイペースに生きてます。私と一緒にです。

「ゴメンね。待った？」

支度が出来たのか、お姉ちゃんが玄関までやって来た。しかし見ると、寝癖や瞼の腫れぼったさが気になった。

「お姉ちゃん、待ってるから寝癖直して、顔も洗ってきなよ」  
「いいの？　じゃあ、行ってくるね」

お姉ちゃんは洗面所の方に走り出した。

「すぐだからね」

声と共にドライヤーと水の音が聞こえてきた。

お姉ちゃんは朝と昼と夜が苦手なようで、時々こうして私が待たされます。まあ、特に気にしてません。年にほんの2、300日くらいですからね。

「ごめんね。今度こそOKだよ」

「うん。じゃあ、行こうか」

私は勢いよく玄関のドアを開き、外に出た。

今日は天気が良く、春の陽気をたくさん浴びることが出来る。こんな日に皆さんと会えると思うと、スキップでもしたくなるような気分になる。

家の前の道を少し行った所に十字路がある。私達はよくそこで待ち合わせをする。クラスの間が来るまで待つのだ。

待つ、と言えば昨日、恵魅ちゃん達が用があるから待たなくても

良いと言っていました。どうしたんでしょうね。

十字路に着くと、そこには神無月先輩、穂村先輩、そして近衛先輩がいた。

「おはようございます」

「おはよお」

私達が挨拶をすると、神無月先輩と穂村先輩が挨拶を返してくれた。

「おはようでゴザル」

「おはようアルよ」

しかし、近衛先輩は気付いてないようだった。

このえまじか  
近衛田先輩。よく一人でいる。本が好きで、どちらかと言うと無口な方。

近衛先輩が気付かないのは、本に集中してるからだ。私は先輩の前まで行って、もう一度挨拶をした。

「近衛先輩。おはようございます」

近衛先輩は本から目を離し、私の方を向いた。その時、私はしまったと思った。集中して本を読んでいるのに、邪魔をしてしまったからです。しかし、

「……おはよう」

先輩は無表情のまま、挨拶を返してくれた。私は少しだけ、ホッとしました。

「あ、みんな。おはよう」

私達の来た反対の方向から声がした。見ると、そこには麻奈美先輩、海道先輩、それと小雪ちゃんがいた。

「あ、おはようございます」

私は三人に挨拶した。

「おはよう！」

相変わらず小雪ちゃんは朝から元気なようです。

「あれ？ 千鶴ちゃん達は来てないんだ」

お姉ちゃんのように眠そうな声で、海道先輩が気付いたように聞いた。

「また井上殿が遅刻でもしたのだろう」

「まったく、裕司の遅刻癖はまだ直ってないアルか」

「進歩のないヤツだな」

「夜未も似たようなものアル」

「すももちゃん。それはどういう意味だい？」

「聞いたままアル」

どうやら、皆さんは春休み前のままらしいです。

「クスッ、みんな変わってないのね」

「そう簡単には変わらないわよ」

麻奈美先輩の言葉に、お姉ちゃんが笑いながら答えた。

「ですよね」

私は皆さんの変わりなさに安心して、吹き出しそうになりながら言った。

「まあ、みんな変わらないで何よりだね」

「それでゴザルな。これが小生達のありのままでゴザル」

「そうだよ。……あれれ？」

その時、小雪ちゃんが無かを探するような素振りを見せた。

「どうしたの？」

「恵魅と君枝がいないのです」

小雪ちゃんの言葉に、みんなが、そういえばと辺りを見渡した。いつも二人は誰よりも早く来るので、まさかいないとは考えなかったのだろう。

「あ、それなら昨日電話があって、二人は用事があって先に行ってるようですよ」

「そうなの？」

「あの二人、今日日直だったっけ？」

「ううん。今日は千鶴ちゃんと和彦君のはずだよ」

「じゃあ、なんで？」

「なんでだろうね？」

みんなが疑問に思っているなか、近衛先輩は輪の外にいたが、二人の不在は気になったらしかった。

みんなが様々な憶測を飛び交わしていた、その時。テツ、テツ、テツとサンダルで走るような音が聞こえた。私達は誰かが走ってきたのだろうと、それを確認するために後ろを振り向いた。

しかし、さっきまで鳴いていたサンダルの音が止み、そこにも誰も居なかった。私は気のせいだと思ったが、あんなにはっきり聞こえていたのだから、気のせいのはずがなかった。じゃあ、何だったんでしょう？ お化け？

私が先程の不思議な現象を、皆さんに話そうとした時。急に空が暗くなりました。

一瞬、太陽に雲が重なったと思いました。しかし、今日は雲一つない晴天でした。じゃあ、鳥？ それにしては大きすぎる。じゃあ、何？

私は空を見上げました。その行為は、その場に居た全員が同時に行いました。

太陽を隠した正体。それは、……。



## 5時間目―拓海・恵魅・君枝

どうも。月森拓海です。今は布団の中に居ます。眠いです。寒い  
です。ダルいです。全てを投げ捨てたいです。とりあえず、正直何  
処かに帰りたいです。

しかし、立たなくてはなりません。あの、二人の悪魔が来る前に。  
俺はベッドの横に座って、大きく伸びをした。

「寝てなきやダメえッ！！！！」

突然ドアが開いたと思ったら、引力に引かれるように、俺はまた  
ベッドに寝かされた。そして、腹にとてつもない衝撃と、激痛が走  
った。恵魅が俺の肩を押して、そのまま膝で腹に乗り掛かってきた  
のだった。

「グフッ！！！」

途端に何かが込み上げて来るのを感じた。多分、真っ赤なものだ  
ろう。

「恵魅、……不意打ちは……卑怯……だぞ？」

ガクツと俺の首が力を無くした。

「勝った！」

ガッツポーズをする恵魅に、死ぬからね、とツツコミたかったが、  
それも叶わなかった。

「あ、お兄ちゃん、まだ寝てるんだ」

今度は君枝が部屋に入ってきた。そして、瀕死の俺の横に立って、ティツと手刀を喰らわしてきた。……喉仏に。

「ブッ!!??」

さっきと同じ感覚で、死後の世界から帰還した。

「づぎぼりぢゃぐび、ただいまぎがんにまぢた!!」  
（月森拓海、ただいま帰還しました）」

喉をやられた（殺られた?）せいで、俺は上手く話せなくなっていた。

「「おはよう」」

二人はいつもの朝と変わらない挨拶をした。全く悪びれた様子なかった。もう俺が死に損なうのは慣れたらしい。はた迷惑な話だ。と言うより、自分でいうのも何だが、俺が理不尽に思えてくる。

俺は特に文句も言わず（言っても意味がない）、ベッドから立ち上がって、本棚からある物を抜きだし、その中から例の物を抜き取った。

「さて、行こうか」

俺を先頭に、三人は部屋を後にした。

階段に着いて、すぐに恵魅が、

「どうするの?」

と言い出した。

分かってる。ジョーズの如くやって来る、あの女の事を言っているのだろう。

俺は、あの餌食に何度もあった。

初日は何も知らないで普通にやられた。二日目は、まさかと思いつつもやられてしまった。三日目は走り抜けたが、餌食になった。四日目は階段二段くらいを無視して飛んだがやられたのだ。五日目は……諦めて無抵抗でやられた。六日目、つまり昨日は恵魅を利用して、初めて逃げ切った。そして、今日は、……

「私は嫌ですよ」

「私も嫌だよ」

俺が来るまでは、二人が餌食になっていた事は、言わずとも分かるであろう。

「任せな。今日は大丈夫だ。……多分」

正直、自信はなかったが、あれなら行けると思った。

俺を先頭に階段を降りて、俺は気配を感じ取った。

居る。奴は必ず居る。

俺はポケットからあるものを取りだし、それに希望を託した。藁にもすがりたい程に絶望的状况。俺はこいつらに賭ける。

「お兄様、それは……」

恵魅が俺の手の中を覗いて言った。俺は頷いて、それを肩の後ろまで降り被った。

お前だけが、……お前だけが、この起死回生の鍵だ。

俺はそれを、階段下に勢いよく……ティツと、ばら蒔いた。

それらはパラパラと舞い降りて、一階の廊下に散乱した。そしてそれを瞬時に拾った人物がいた。

勝った。俺等は勝利を確信して、そこを素早く突破した。

俺の作戦は見事に成功したのだ。妹達も初めて誰の犠牲も出さずに通り抜けた事を喜んだ。その三人の姿は、さながら地球を守った英雄の気分だった。

俺等は机の自分の席に着き、先程の事が嘘のように脱力しきっていた。

「酷いよ。卑怯だよ。無効だよ！」

何とも情けないような悔しそうな、それでいて駄々っ子のような声を出して母さんが居間に入ってきた。その手には、俺がばら蒔いた数々の物が握られていた。大切なもののように。

「俺が卑怯なら、あんたは卑劣だよ。ってか、犯罪者だよ」

さも冷たい言い方に聞こえよう。しかし、常人なら誰でもこう言い放つだろう。

俺がばら蒔いたもの。それは俺等三兄妹が写った写真だった。それも俺等も知らない、秘密の盗撮写真だ。

「酷いよ。子供達の成長を喜ぶために撮ったのに」

「だからって、盗撮は酷いですよ」

「ってか、卑劣だね」

「ってか、自分を正当化させないで欲しい」

俺等は一斉に頷いた。

まさか、自分の母親が盗撮していたなんて思いたくなかった。

「酷いよ（涙）」

「お兄ちゃん、これで全部？」

「いいや。明日も同じ事するために部屋に保管してあるよ」

その時、母さんの目がキラッと光り、部屋を出ようとした。

「まあ、隠してあるから見付けられないけどね」

「そんなあ」

俺の言葉に、部屋を出ようとした母さんは、瞬時に足を止めた。

「他にはどんな写真があったのですか？」

「うん？　まずはお前等が幼稚園児のものから、今に至るまでのまだ健全なもの」

「健全……って」

「あととは着替えのもあったかな」

俺の放った言葉に、俺以外の三人は、ムンクの『叫び』のような驚愕の顔をした。

「ホントに！？」

「うん」

「……じゃあ、お風呂は？」

「あったんじゃないかな？　少なくとも俺のはなかったよ。俺の場合、風呂場に気配を感じなかったからさ」

「……見た？」

「安心しな。最後の方は俺のばかりで、すぐに判断した。そして、燃したよ」

俺の行為に安堵の表情を浮かべる二人。それとは対で、またムンクの『叫び』のような表情の母さん。

「何で燃やしちゃったの!?!」

「「誰でも燃やすわっ!?!」」

三人の息がぴったりに重なり、母さんは悲しそうな顔をした。自業自得だ。

その後、母さんは俺が恨めしいのか、無気力な目で見てきた。顔を洗うとき。髪を解かすとき。着替えのとき。トイレから出てきたときまでも。……ずっと。

やっと支度が終わり、俺等は玄関で靴を履いていた。もうその頃には、母さんはケロッとした表情をしていた。

「さて、行きますか?」

二人にそう言い、玄関のドアに手を掛けた。

「拓海ちゃん。ネクタイ曲がってる」

言われて初めて気付いた。ネクタイよりストーカーに気を取られていたせいだろう。

俺はネクタイを直し、またドアに手を掛けた。

「あ、そうだ。三人とも?」

また母さんが話し掛けてきた。

「1＋1＝？」

「「2」」

パシッという音と共に、一瞬の閃光が焚かれた。

母さんの手には、プロが使うような大きなカメラがあった。

「アハッ☆」

陽気に笑う母さん。そんな懲りてない母親に、呆れてものも言えない俺等。突っ込むのも疲れるので、俺等は静かに家を出ていった。多分、家を出た俺等は同じ事を考えただろう。

学校より疲れるわぁ、と。

## 6時間目―拓海・学校到着？

ダルいです。拓海です。朝です。帰りたいです。このセリフは二度目です

あのカメラ、どうにかしないとね？

母さんが何処から取り出したのか、あのカメラ。それが一番の悩みだったので、新しい学校生活の事なんて考えてなかった。

そうこうしている内に、俺等は学校に着いていました。今日は学校を初めて見た。学校を見て、正直、開いた口が塞がらなくなった。デカイ。デカ過ぎるでしょ！？

「おい、おい、おい、おいおい、おいおいおいおいおいおい  
！！」

何故こんな事を言ったのか、自分でも訳が分からなかった。しかし、それだけデカイと言うことを分かって頂きたい。

流石は国でも1、2を争う学校の敷地だ。面積も半端じゃない。どデカイ校門の先には、まるで一つの村のような広さが広がっている。校門から喫茶店があることを伺えた。そして、その奥には五階建ての建物が見えた。

「あれは初等部の校舎だよ」

まず、初等部の校舎があり、次に初等部、中等部兼用の体育館がある。そして、中等部の校舎があり、高等部校舎、高等部の体育館と続いているらしい。それぞれの校舎の前にはグラウンドがある。

ちなみにこの学園は、山の上に設立しており、俺等がいる反対側に大学がある。あと、これはあくまでもまだ噂だが、幼等部を作るとも聞いたことがある。



まあ、一目見ただけでも大きいが、この話を思い出すとさらに大きく感じてしまう。

「なあ？ 二人は初等部から通ったんだよな？」

「うん」

「はい」

「もう慣れたろ？」

「当たり前だよ」

「当たり前ですよ」

はあ、……すっごく不安になって来たわ。さっきまでカメラの事しかなかったのに、今度は逆に学校への不安が募っていた。

「あれは初等部の校舎だよ」

まず、初等部の校舎があり、次に初等部、中等部兼用の体育館がある。そして、中等部の校舎があり、高等部校舎、高等部の体育館と続いているらしい。それぞれの校舎の前にはグラウンドがある。

ちなみにこの学園は、山の上に設立しており、俺等がいる反対側に大学がある。あと、これはあくまでもまだ噂だが、幼等部を作るとも聞いたことがある。

まあ、一目見ただけでも大きいが、この話を思い出すとさらに大きく感じてしまう。

「なあ？ 二人は初等部から通ったんだよな？」

「うん」

「はい」

「もう慣れたろ？」

「当たり前だよ」

「当たり前ですよ」

はあ、……すっごく不安になって来たわ。さっきまでカメラの事  
しかなかったのに、今度は逆に学校への不安が募っていた。

「あれは初等部の校舎だよ」

まず、初等部の校舎があり、次に初等部、中等部兼用の体育館が  
ある。そして、中等部の校舎があり、高等部校舎、高等部の体育館  
と続いているらしい。それぞれの校舎の前にはグラウンドがある。

ちなみにこの学園は、山の上に設立しており、俺等がいる反対側  
に大学がある。あと、これはあくまでもまだ噂だが、幼等部を作る  
とも聞いたことがある。

まあ、一目見ただけでも大きいが、この話を思い出すとさらに大  
きく感じてしまう。

「なあ？ 二人は初等部から通ったんだよな？」

「うん」

「はい」

「もう慣れたろ？」

「当たり前だよ」

「当たり前ですよ」

はあ、……すっごく不安になって来たわ。さっきまでカメラの事  
しかなかったのに、今度は逆に学校への不安が募っていた。

「あれは初等部の校舎だよ」

まず、初等部の校舎があり、次に初等部、中等部兼用の体育館が  
ある。そして、中等部の校舎があり、高等部校舎、高等部の体育館  
と続いているらしい。それぞれの校舎の前にはグラウンドがある。

ちなみにこの学園は、山の上に設立しており、俺等がいる反対側に大学がある。あと、これはあくまでもまだ噂だが、幼等部を作るとも聞いたことがある。

まあ、一目見ただけでも大きいが、この話を思い出すとさらに大きく感じてしまう。

「なあ？ 二人は初等部から通ったんだよね？」

「うん」

「はい」

「もう慣れたろ？」

「当たり前だよ」

「当たり前ですよ」

はあ、……すっごく不安になって来たわ。さっきまでカメラの事しかなかったのに、今度は逆に学校への不安が募っていた。

「お兄ちゃん、緊張してる？」

「そ、そりゃしてるさ。まさか、こんなに広い学校が存在したなんて」

正直、喉が乾いてきた。

「さて、まずは理事長さんに挨拶しますよ」

「ああ、そうだな」

そういえば、先程から何だか嫌な予感がしていた。しかし、それが何なのかはまだ理解してなかった。

そう。これは何かを忘れてきたような感覚だ。

「お兄ちゃん、どうしたの？」

君枝が振り返って俺を見たとき、俺は鞆の中を確かめていた。そして、先程の予感は的中していた。

「……ない」

「「え？」」

「入学許可書がないんだよ」

「え！？」

「ど、何処に忘れてきたんですか？」

「確か……そうだ。母さんに預けておいたんだ。絶対になくさないような場所に置いて、って」

俺は、鞆のチャックを締めて、今来た道を全速力で走り抜けた。

「すまん。すぐに戻るから」

俺は坂を、ペタペタと音を立てて、光速（と感じる程）の速さで駆けて行った。

後に残された二人は、

「あんなの無くて、あの理事長さんならどうにかしてくれそうですよね」

「まあ、いいんじゃない？」

と、こんな会話をしたが、もちろん俺に聞こえる筈はなかった。

「それより、これからどうしようか？」

「とりあえず、みんなとの待ち合わせ場所に行きましょうか。暇ですし」

「そうだね」

二人は俺の後を追うように、ゆっくり歩いて坂を下った。

一方、もうパニックに陥っている俺は、家の近くにある十字路の手前に差し掛かっていた。

しかしその十字路には、制服を着た何人かの女生徒がいた。

この速さで大声を上げても道を開けてもらうのに時間が掛かりそうだ。かと言って、一回停止するのも面倒だ。……仕方ないかあ。

俺は一つの決断をした。

通り抜けるのがダメなら、……別のルートだ。

俺は止まる気などは、さらさらしない。しかし、目の前に集まっている女生徒達との距離は、段々と縮まっていた。

あと、10 m。……9 m。……8……7……6……5……4……3！

俺は女生徒達の3メートル手前で足に力を入れて、彼女達の頭上を飛んだ。出来るだけ空気抵抗を避けたかったので、身を丸くして前転をするように空中で回転した。

思った以上に距離を稼げて、また時間も掛からずに済んだ。まさに一石二鳥。そう思った。少なくとも、飛んでいる時までは……。地面が近くなり、上手く着地できた。上手く着地した、……。俺はそう思った。しかし、……それは単なる思い過ごしだったのかもしれない。

足が地面に着き、すべては成功したと思った。しかし、立ち上がり走り出そうとした時だった。

「あれ？」

ゴンッ、ベキヤッ！と音を立てて、俺の頭が壁にめり込んだ。

着地は確かに成功し、万事解決と思ったが、俺の三半規管が急な回転に耐えきれなかったらしく、足が縛<sup>もつ</sup>れて隣の塀に頭が当たったのだった。

痛い。物凄く痛い。

塀にめり込む程だから、痛みもそれに比例して当たり前だ。しかし、この時の俺に痛がつてる暇はなかった。なので、涙を我慢して俺は再び走り出した。

思えば、まさかその女生徒達が、これからの俺と関わりを持つ事を、俺も、そしてその女生徒達も、まだ知らなかった。

さて、次回からの俺はどんな困難が待っているのでしょうか？  
負けるな、俺！

## 7時間目―麻奈美・まずいんじゃない!?

今さっき、私達の目の前で、凄い人が駆け抜けて行きました。

その人は、私達の頭上を飛び越えて、そのまま走って行ってしまいました。しばらく、私はその人の背中を目で追っていました。その人が突き当たりを曲がった後も、私は言葉を発しずに、ただ呆然と眺めていました。どうやら、その場にいた全員が同じ様でした。心中は多分驚きの一色だと思います。数人を除いては……。

「「おはようございます!」」

その同時に重なった二つの声が聞こえて、やっと私は我に帰った。視線の方向を変えて、反対側を見ると二人の女の子がいました。

片方は短い髪を垂らした少女。もう一方は長い髪を後ろで結っている。

「どうかしたんですか?」

短い髪の少女、恵魅ちゃんが問い質してきた。

「それがね、」

「小雪達の頭の上を人が跳んでいっただよ。グルグルって」

私が答えようとしたが、小雪ちゃんに横取りされてしまった。

「跳んでいった? 人が? ……その人、サンダルだった?」

「うん、そうだったよ。私、確かに聞きましたよ」

花月ちゃんの言葉に、私達全員が頷いた。



「ああ、それなら多分」

「おはよッス」

急にその場にはなかった低い声が、君枝ちゃんみぎちゃんの言葉を遮った。そっちには、四人の男女がいた。私達のクラスの電車通学の面々だった。

「あ、おはよう」

みんなが、それぞれのタイミングでお互いに挨拶した。来ないと思っていた恵魅ちゃん達も来たので、私達のクラスが全員集合したという事になる。

全員が集合した事により、私達はさっき君枝ちゃんが言おうとした事を、すっかり失念してしまった。しかし、その話題はすぐに持ち出された。予想外の、さっきまでここにいなかった人物によって。

「あれ？ アイツはどうしたんだ？ 今日から通うはずだろう」

こう言ったのは和彦君だった。この発言に、恵魅ちゃんと君枝ちゃん以外のみんなの頭の上にハテナのマークが飛び交った。

「ああ、ちようどその話をしてたんですよ。それならさっきここを通って行きましたよね？」

多分、さっき私達の上を通過した人の事だろう。

「うん。さっき凄い勢いで私達の上を通過して行ったんだよ」  
「そうなんだ。アイツらしいな」

和彦君は笑いながら言った。

つまり、さっき跳んでいった人は、恵魅ちゃん達の知り合いであって、和彦君の知り合いでもあるらしい。加えて、今日から私達の学校に通う人らしい。

「一体何者でゴザル？」

蜜柑ちゃんがみんなを代表して三人に問い質した。それはみんなが気になった事である。もつとも、アレを目の当たりにした人物なら特にだ。でも、それを聞いた蜜柑ちゃんと、その隣にいた李ちゃんは正体を知りたいというよりは、何だか楽しそうな顔をしていた。

「ああ、アイツは」

和彦君が話をしようとした瞬間、またしても話を遮るものがあった。

さっきのペタペタという軽快な音が聞こえたのだ。私達が振り向いた瞬間、その音よりも車の音が鳴り響いた。車のブレーキ音だ。一瞬、奥の十字路に人影が見えたようだったが、それを横切るように車が突っ込んだ。バンツという鈍い音と共に……。

そして、車が見えなくなり、私達は瞬時に判断した。

……車に轢かれたのだと。

しばしの沈黙が訪れた。誰も言葉を発しない。発せない。

「ね、ねえ？ ま、まずいんじゃない？」

最初に誰が発したのか、私達は凄惨な現場に遭遇してしまったのだと、その時認識した。

「きゅ、きゅきゅきゅ救急車！」

「そうだ。確か114」

「違う！ 119だ！」

その場は混乱の場と化していた。しかし、次の瞬間、

「いったい」

と言う、間の抜けた女の子の声が聞こえた。それは和彦君の方から聞こえた。いや、正確には和彦君の肩からだ。

全員が見ると、一人の女の子が和彦君におぶってもらっていたのだった。

「なんだよお。心配させるなよ」

「うう、……轢き逃げされたあ」

「おいおい、お前の姿を見る限り、むしろお前が当たり屋の立場だぞ」

「ちゃんと右、左って確認したもん」

「ホントに心配したんですよ」

和彦君と女の子の会話に、恵魅ちゃんが割って入った。

「あはは、ごめんごめん」

彼女は笑いながら謝った。

異様な光景だった。車に轢かれたと思っていたと思っていたのに、今はケロッと漫才のような会話をしてるのだから。

「ねえ、和彦？ その子、誰なの」

千鶴ちゃんが和彦君に聞いた。

「あれ？ お前も知ってるだろう、千鶴？ コイツは」  
「えっ！？ 千鶴！？ マジかぁ！ 久しぶりだなあ。覚えてないか？ ホラ！」

彼女の言葉に、千鶴ちゃんは首を傾げた。そして、さっきよりも近付けて、その顔を確認した。

「えっ！？ もしかして……？」  
「久しぶりい！」

彼女はそう言って、千鶴ちゃんの方に手を延ばした。千鶴ちゃんはそれに応えて握手した。

「嘘！？ 全然分かんなかった。髪伸ばしたんだ」  
「ああ、少しな」  
「ちよっとどころじゃないよ。うわぁ、マジで久しぶりい！」

どうやら、本当に久しぶりのようです。これで彼女の正体がある人物が四人になったのだった。それ以外のみんなは置いてきぼりを喰わされた。

一体、誰なんだろう？ ……あれ？ 私達を飛び越えた人って、確か……？

「何だよ、和彦お？」

裕司君が肘を和彦君の横腹に当てながら言った。

「結構、可愛い娘じゃん。紹介しろよ」  
「可愛い？ おいおい、コイツは」

「コラッ！」

急に女の子が大声を上げた。表情から察するに、何か怒っているのだろう。

「何のイジメだよ。何の!？」

彼女は和彦君から降りて、自分の足で立った。その時、私達は理解した。やはり私達を飛び越えた人物と同一人物であること。そして、なんで怒ったのかを。

着地した彼女、いや

「俺は男だ。れっきとした、な！」

彼が大声で言った。

こうして、私達は彼を中心に様々な事件に巻き込まれる事になる。  
しかし、それはまだ先のことだが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6521c/>

---

Happiness days～月之章～

2010年10月28日04時29分発行